



あめまぢ

の

ベガ

18
FOR ADULT



こんにちわ、初めまして296です。カカサク本、2冊目ですよ！（自分だけが待望の）
表紙のサクラの髪についてる薔薇ですが一応は黒薔薇のつもりで描きました。
色々な説はありますがその中でも黒薔薇の花言葉「貴方はあくまで私のモノ」
とゆうのがあるのを知って、これは描くしかないとなりまして！
カカシ→サクラがスキスキスキーです！！
あ、中身なんですが、なんだかすごい内容になってしまいました…
いやでも実はカカサクを描くぞ！ってなった時に一番描きたかった話だったりします。
そしてまたもや18禁で失礼します。自分の中でカカサクは異常に色気があるCPで
ありまして、ついついいうっかりエッチなシーンを加えたくなってしまう。
それでは中身頑張りたいと思います。
本編よろしくおねがいします。



ほら
やっぱり!!



もう何よ
呼び出しって…

どうせ自分はまた
あの下品な本読んで
サボってるクセに!



うん…まあ

すぐ終わるから

そーして
下さい

ガツツリ
作業中
でしたので



あ

来た来た

来た来たじゃ
ないわよ!

何で任務中なのに
こんなトランシーバーも
届かない場所まで
来なくちゃいけないのよ!



…サクラ

お前の好きな奴は?

……
……
ハア?



……あれ？
先生どうして
額当て
外してるの？

……サクラ



ちよつと何よ……
暇だから作業妨害
のつもり!?

そんなの先生だって
知ってるじゃない!
サスケ君に
決まってるでしょ!?



もう一度、聞く

お前が

好きな奴は

誰……?

ゴッ
ン
アッ

グ
ル
ル



好きな人は…

私の…

ぽ
ぽ

ぽ
ぽ

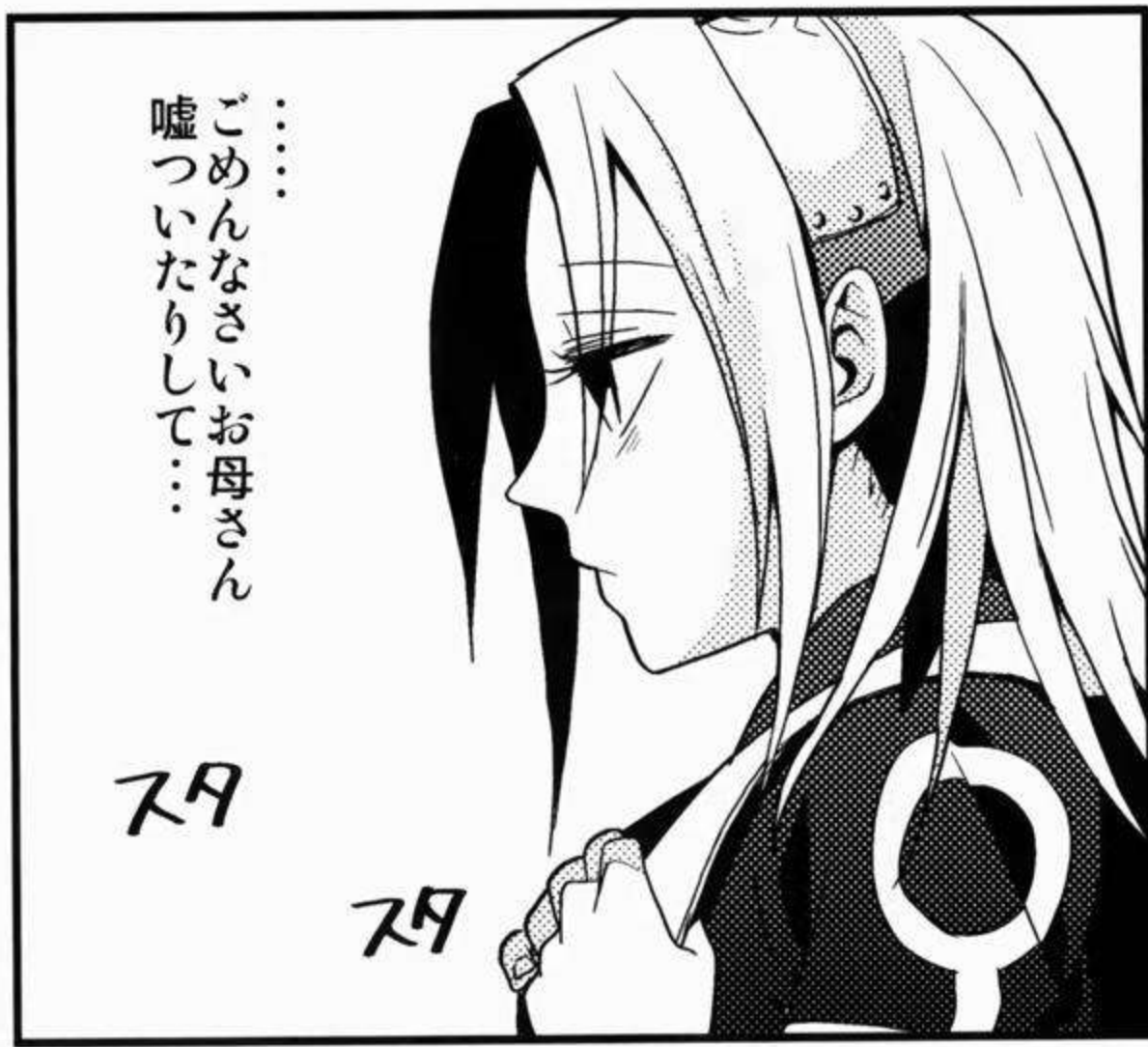


……

ザ
ア
ア
ア
ア

唇から
嘘を吐かせた

これが自分の
最初の罪







俺はサクラに
幻術をかけた

いくらサクラが
幻術に素質があるからといつても
強力な術を下忍のサクラが
跳ね返せる訳もなく――

…うん…

サクラが恋焦がれていたのは

効果はたったひとつ

…先生にこうやって
ぎゅってされるの
好きなの

俺も…
サクラの髪
いい匂いするしね

ね…

キス、しようか

サスケではなく



俺だとゆう事――



フママ

キ

なんか恥ずかしい…

キスの後
どんな顔して
先生見ればいいのか
わかんない…



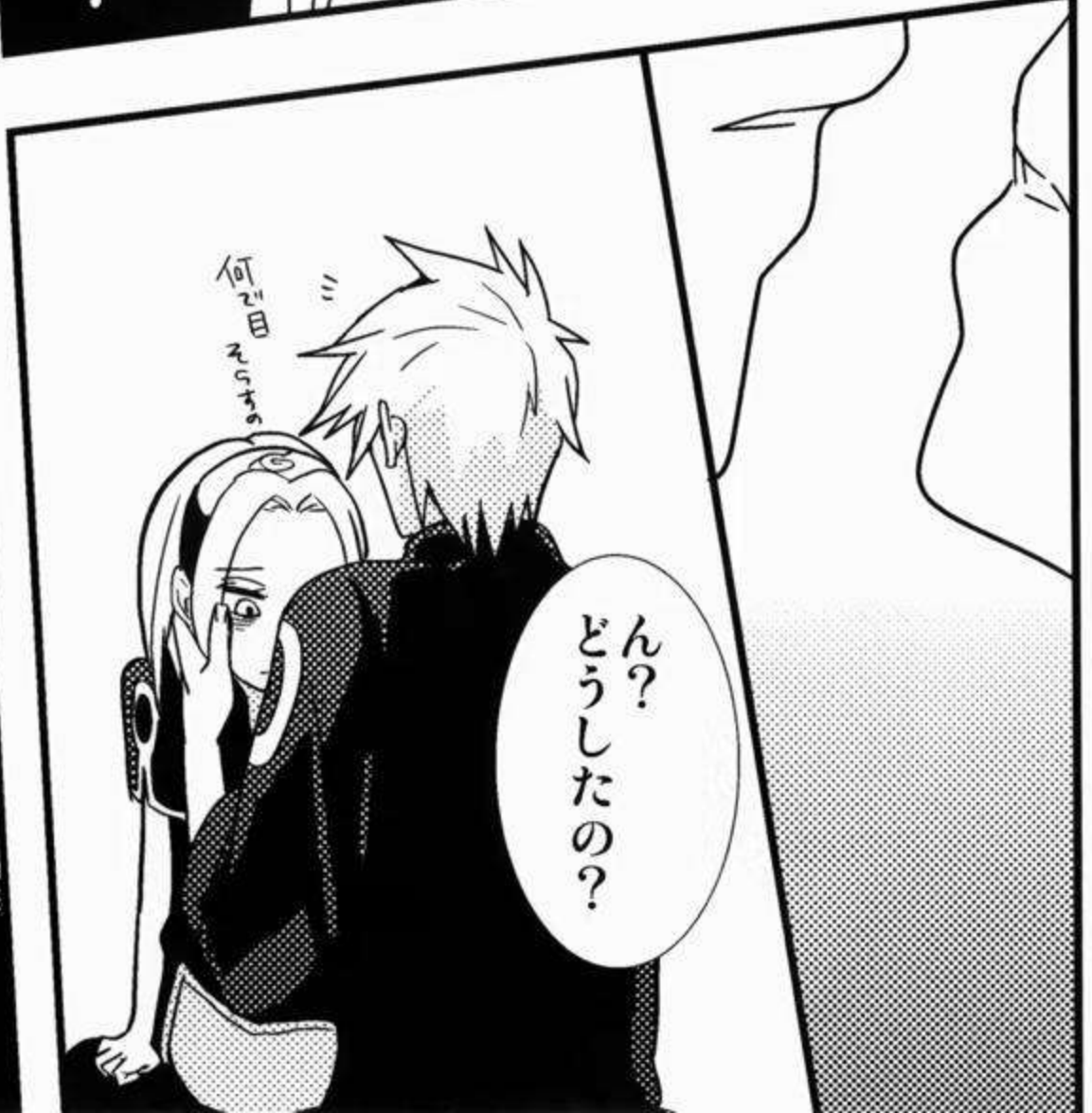
スタ

……



アハハは
サクラは
かわいいーなあー

やっ



何さ

ん？
どうしたの？



でも先生…

ど…
どうして
最後まで
しないの…?

ん?

やっぱり私が
子供だから
イヤなの…?

馬鹿だなあサクラ
そんな事
気にしてたの?

なっ…!
私は真剣に
悩んでるのに!

へっ
そうだったんだっ?

馬鹿なこいつ

とは言葉
勿論サクラを
想像して一人で
してた



やっと手に入れた
お前を
大事にしたかったんだ

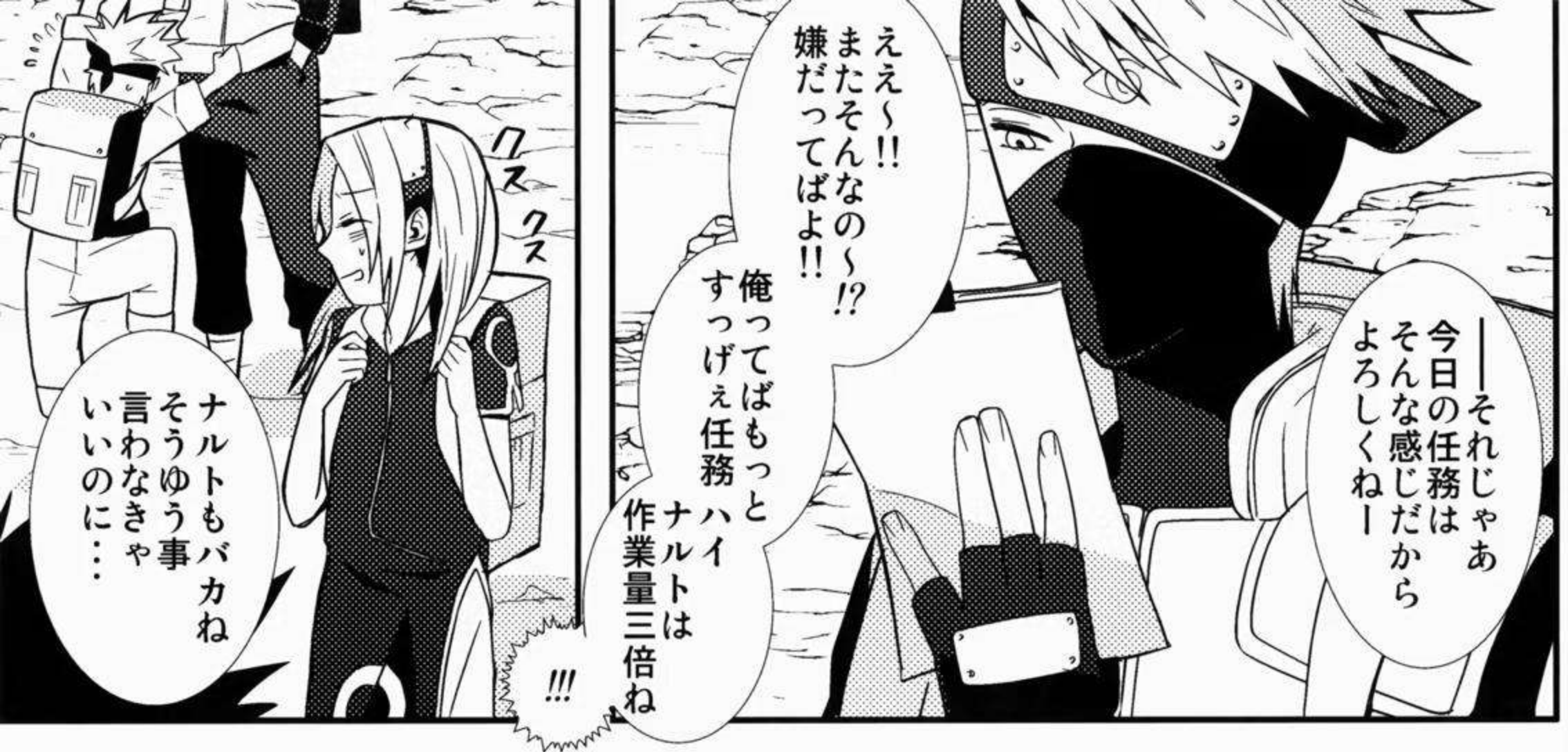


ハイン
ハイン
大人に
なってる

術にかけている
とはいえ
ソレを奪うのは
どうかと

今更な倫理で
その時は
留めていた

やっぱり子供
扱いしてるんじゃない



—それじゃあ今日の任務はそんな感じだからよろしくねー

ええ〜!!
またそんなの〜!?!
嫌だっばよ!!

俺っばもっす
すっげえ任務ハイ
ナルトは作業量三倍ね

ナルトもバカね
そうゆう事
言わなきや
いいのに…

!!!



藁っば言ってもこれだけ量があると

さすがに疲れるわね

ふー…



ハア…
それにしてもこんな事が修行になるのかしら

ナルトじゃないけどちよつと考えちやうわよねえ



あつ…
ちよつと持ち過ぎちやったかも…



きやっ





いえいえ
大した事
ありませんでしたよ

アンタなんにも
してないだろ!!



いや
本当に
助かりました

おかげさまで
無事に春を
迎えられそうです



だっ
さい
サスケ君!!

!!

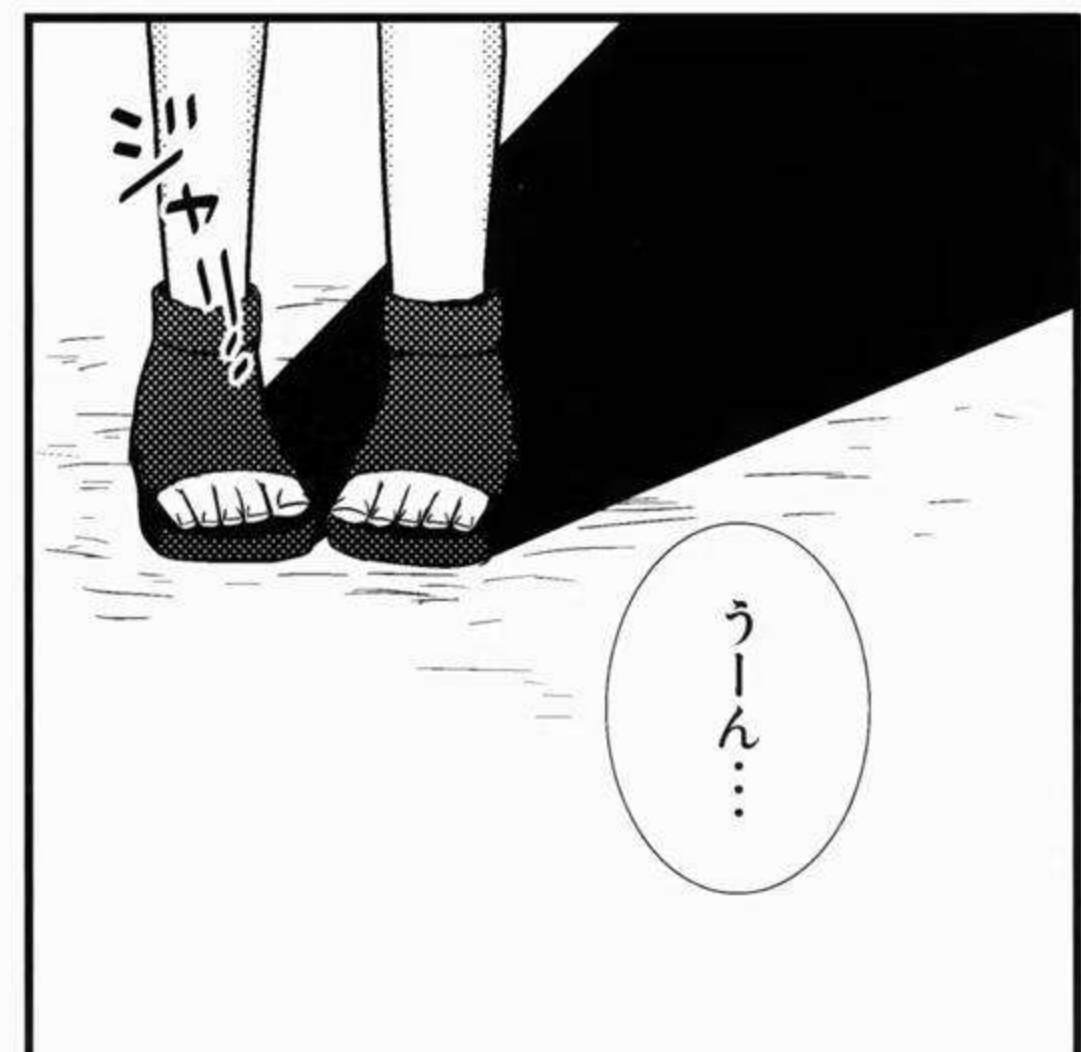


サスケ君
なんだか顔色が
悪いみたいだけど...

心配...

あー!
ホントだ
顔真っ青だってばよ!

...問題ない





先生!!

予定変更したの



先生っ

先生んち
こっちじゃ
ないよっ!

アカデミーでっ

歓楽街の方は
あんまり
来ちゃダメって



どこ…行くの…?!

サクラの声
誰にも
聞かれないし

防音効いてる
トコ行きたいの

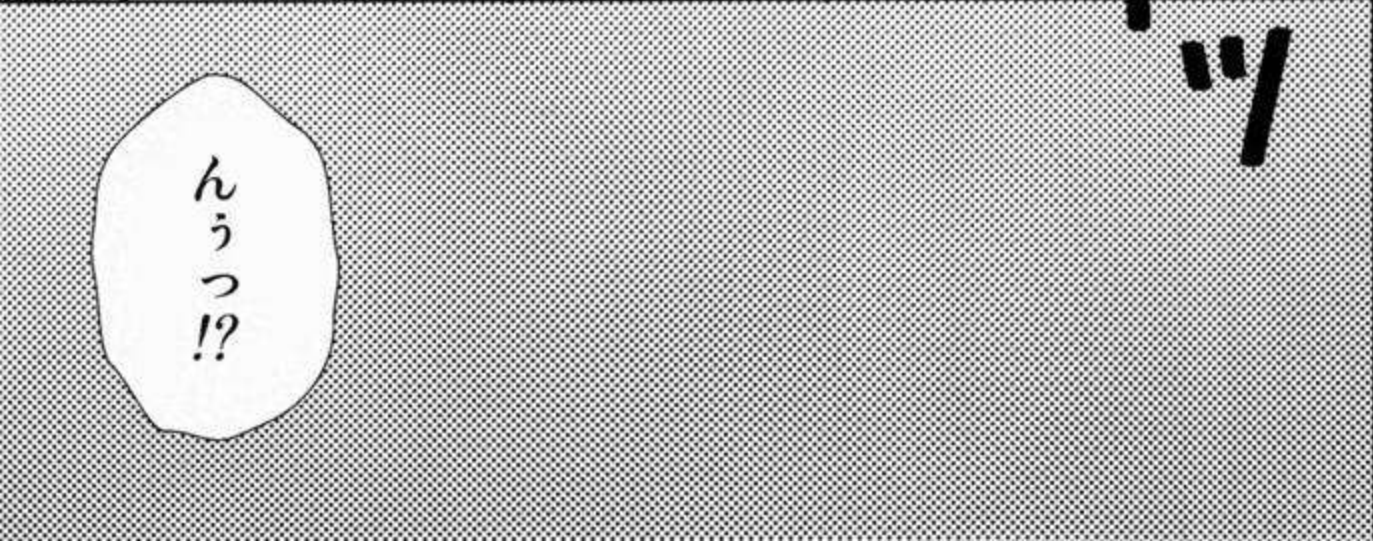


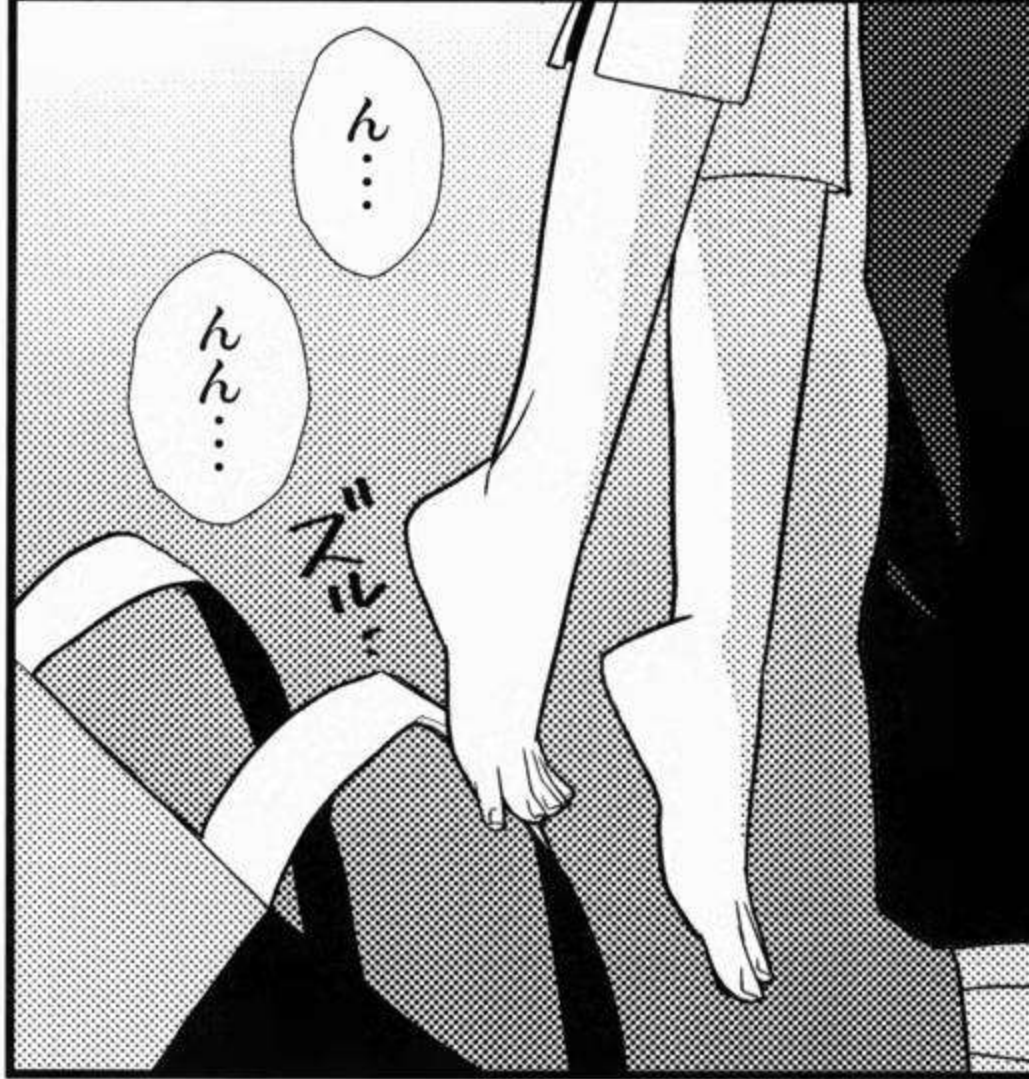
それ
被ってて



だから…!

出合茶屋







俺にサクラを頂戴

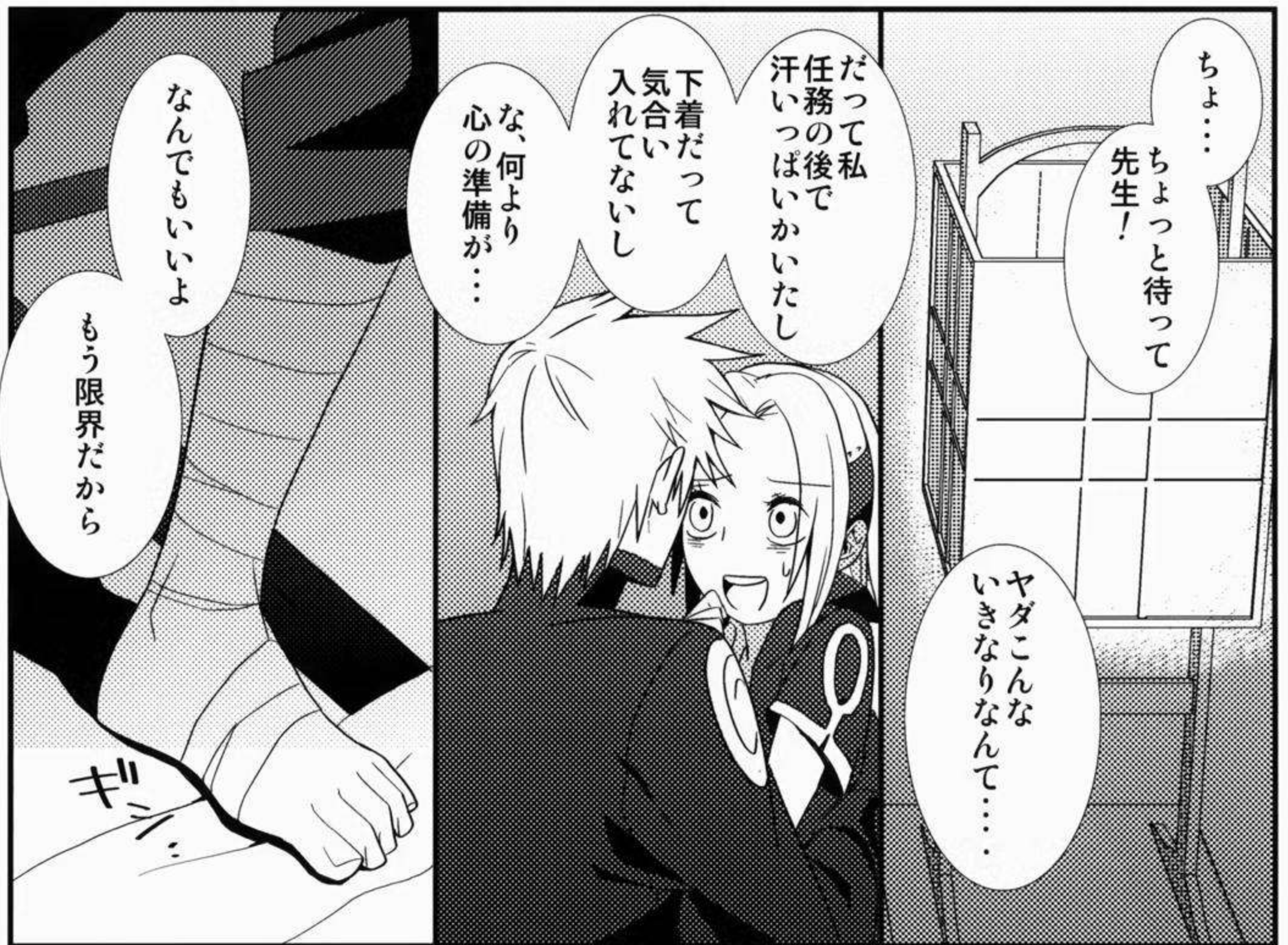
え…

え…!?

ヒキツ



もう我慢できない



ちよ…

ちよつと待って
先生!

ヤダこんな
いきなりなんて…

だって私
任務の後で
汗いっぱいかいたし

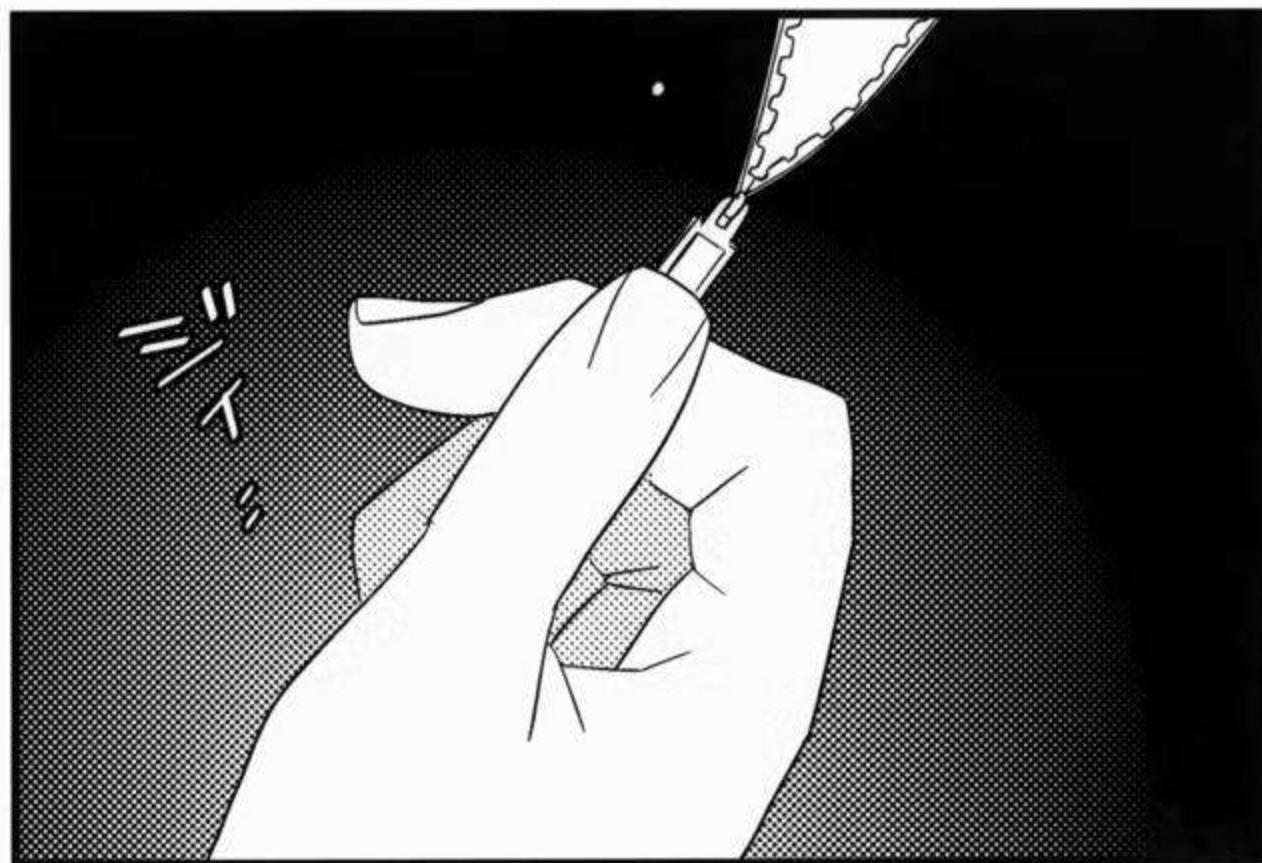
下着だって
気合い
入れてないし

な、何より
心の準備が…

なんでもいいよ

もう限界だから

ギン







あ……っ

や、やだ……



そんなトコ
見ないで……

ひあっ!?



ああ……っ

やああ

せ……せんせっ

どうしたの
サクラ

キョク

キョク

キョク

あっ

ミラ

そこ汚ない……っ

やっ

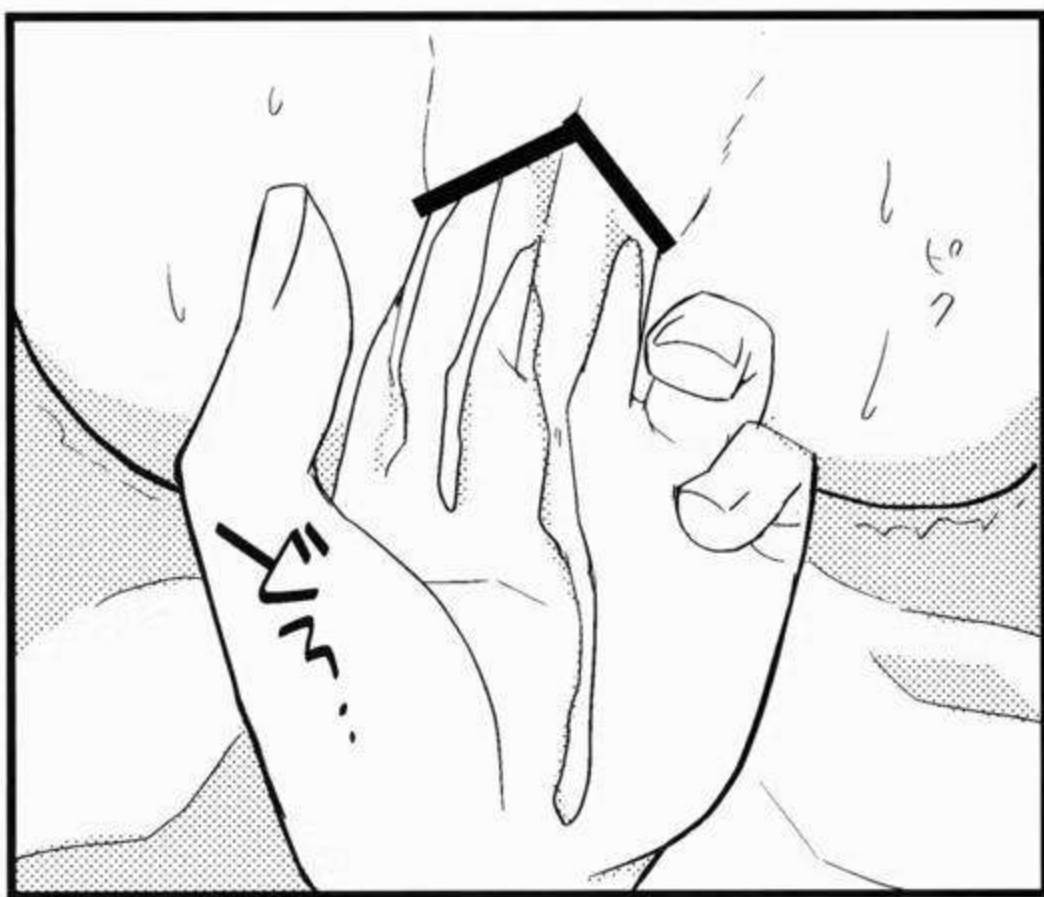
キョク

そんな事ない
綺麗だよ

ああっ

クキョク

キョク





何度も夢で見たんだよね







サクラの中

ああっ

うあ

ズツ
あ

キツくて
すっごい
気持ちイイ

すっごい
濡れてきた

やっ...
だっ

あっ

やっ...



んうっ

せんせっ...



せんせえっ

俺だけに

もっと
もっと
サクラの声
聞かせて



やあっ

あっ



うあっ

ああっ

ホラ
俺の全部
入っちゃってるよ



気持ち良くて
おかしく
なりそうでしょ？



ホラ

あううっ

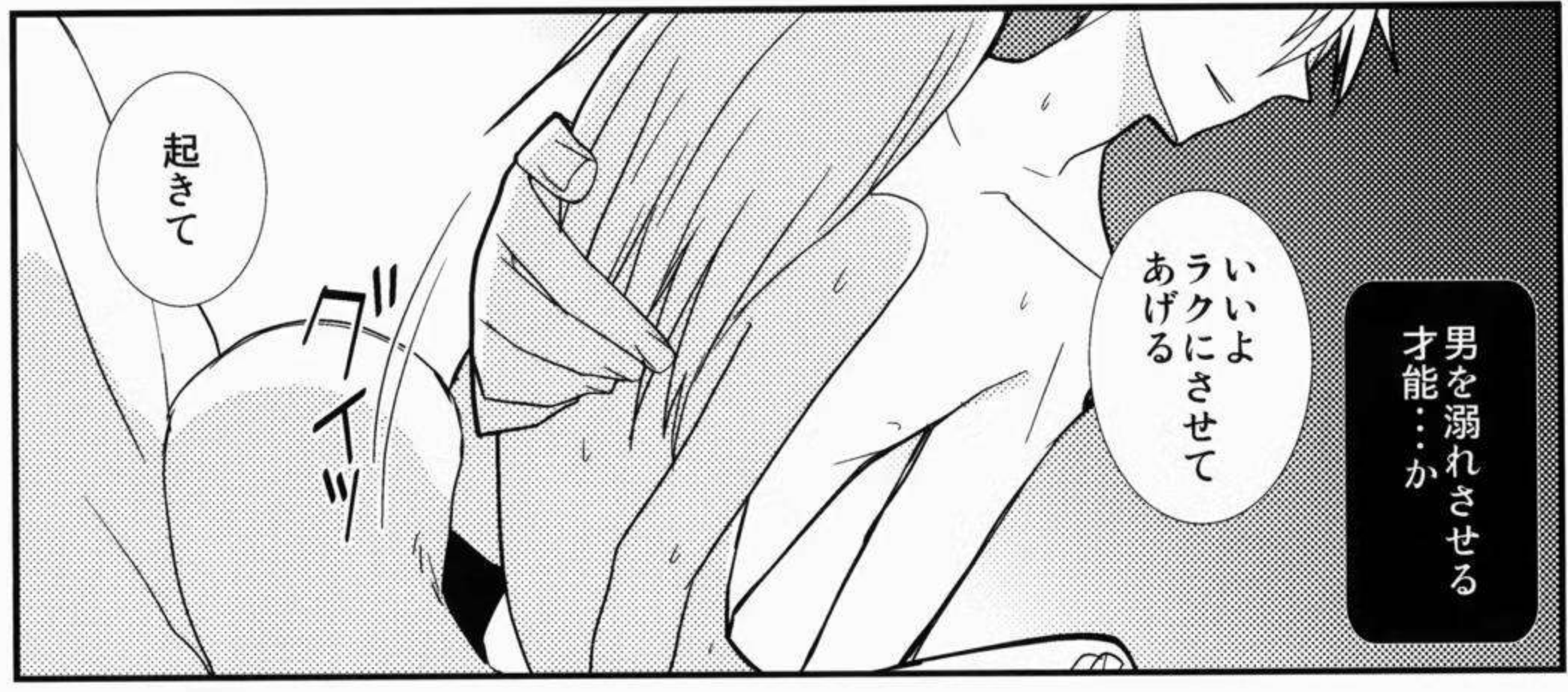
ズキーン！



カカシ先生…
私、ヘンなの…

体の奥が
ジンジンして…

辛いよ…



起きて

いいよ
ラクにさせて
あげる

男を溺れさせる
才能…か



きつと君も
そう
怒るだろう

愚かだと思う



サスケなんて
見るんじゃないよ



手に入らないのならば
せめて
偽りの君でも構わないと
それでも自分を見て欲しいと
願った俺を



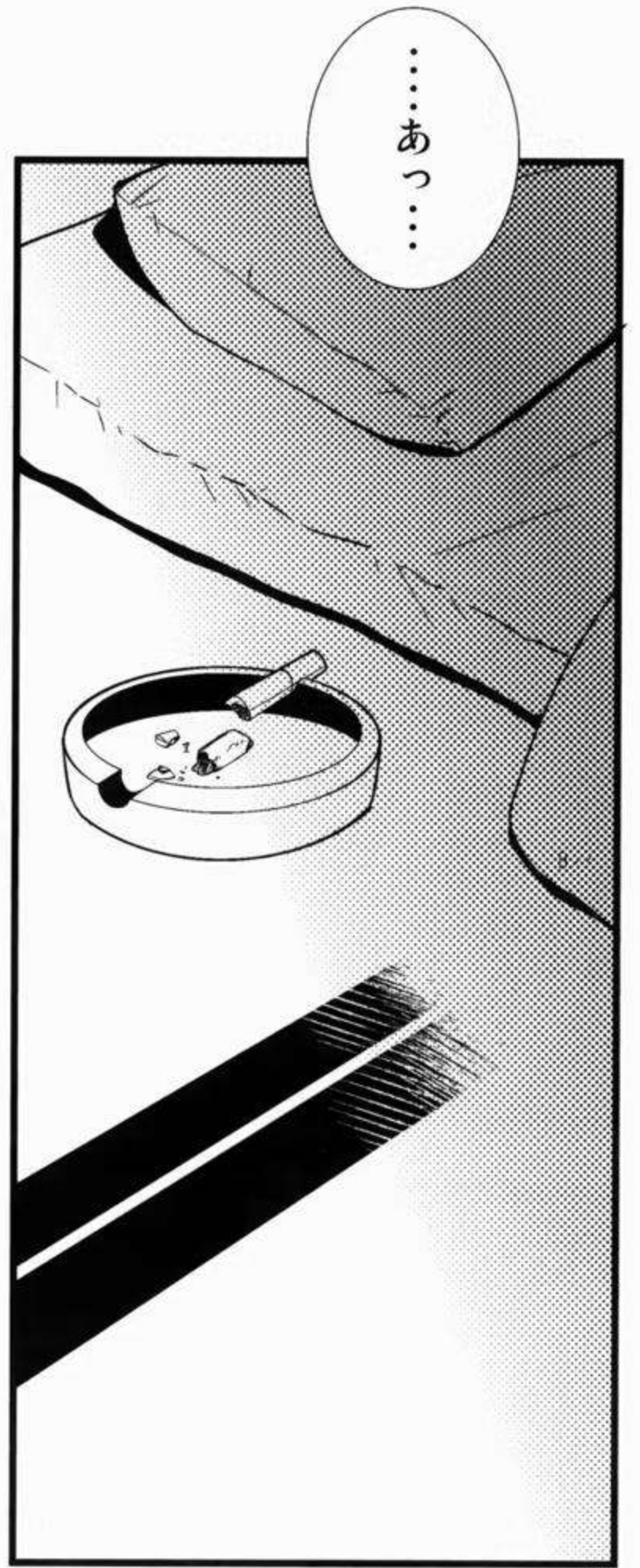
俺だけを
見るよ……っ

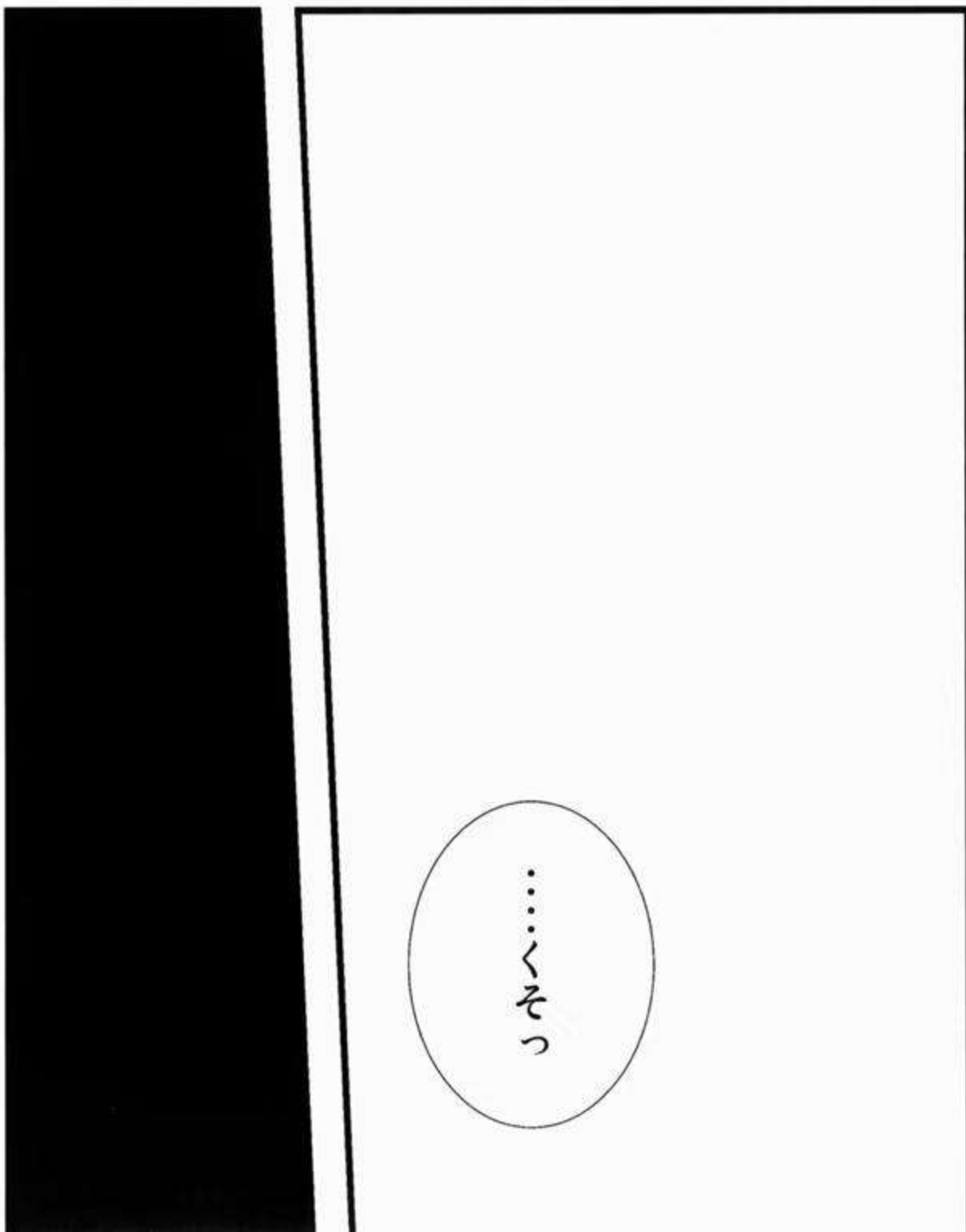
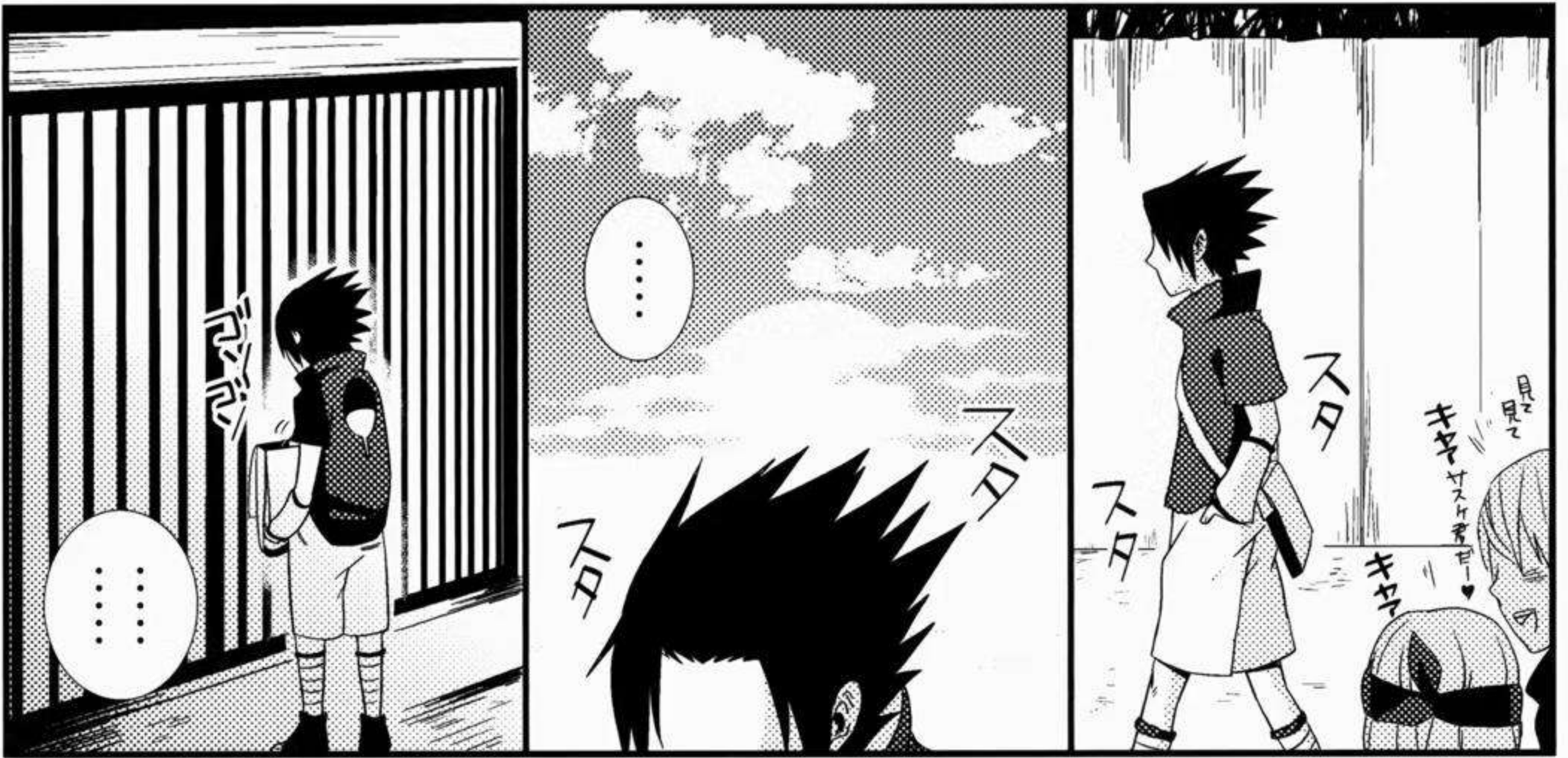




その夜
俺は更に強い幻術を

彼女にかけた







ぐあっ!!

やっと来たね



待ってたよ
サスケ

気配も
消しきれずに
上忍の部屋に
忍び込もうなんて

うちの末裔も
まだまだだね!



……見てみる?



……ああ
いるよ

あっちの部屋に
俺と



カカシ テメエ
サクラに
何しやがった!!

知ってんだぞ!!

こっちに向かって
きてたのは



なあ？

サスケ



ホラ、サクラ

折角
お客さんが来たん
だから

なっ……！



そっち
向いて

あっ……



よく
見せて
あげなさいよ





.....

アンタ
頭おかしーんじゃ
ねえのか!?



やめろ!!

この
ゲス野郎!!!



はげっし...っ
せん、せえっ...

あんあんっ

ひああっ

あんっ

ふあっ

あっ



あ

あ

ああ

ああ

せんっせ...



サクラ!
目を覚ませ!

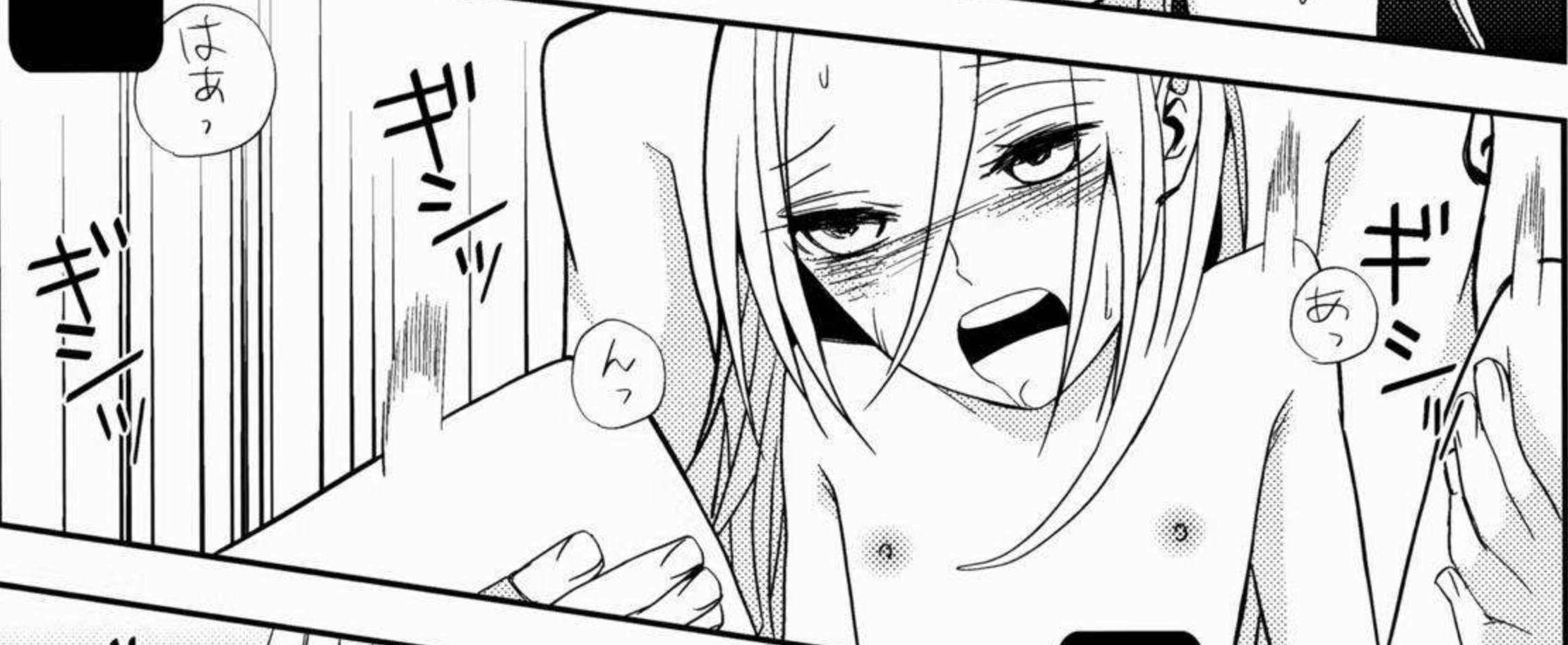
あっ...

んはあ...

……イヤ……



はあっ



センセイ……

ヤメテ……



サスケ君……



……見ないで……
サスケ君……





変なの
フフッ

幻術が切れた訳ではない

ヒッ
タッ

すごく
びっくりした
顔してるよ……？



……！
どうしたの？
カカシ先生

ホッ
ホッ



それ程までに——

ザッ

ザッ



むしろ日に日に
効果を強めている

それを拒んでまで
サクラ
お前が泣くなんて





急ぐわよ！先生

あーもう！
サスケ君とあんなに
離れちゃった
じゃない！



お？

キラキラ



……先生……？



ホッ！
キラキラ
歩くと



——まあ

ハッハッ

クッス



カワイイから、いいか



せんせ……？

どうしたの？

大丈夫？



サクラ

サクラ

俺ね
それでも

お前の事が
好きだったんだよ……



……
大丈夫だよ



サクラ

……せんせ？



ごめんね

…私も

大好きだよ
先生

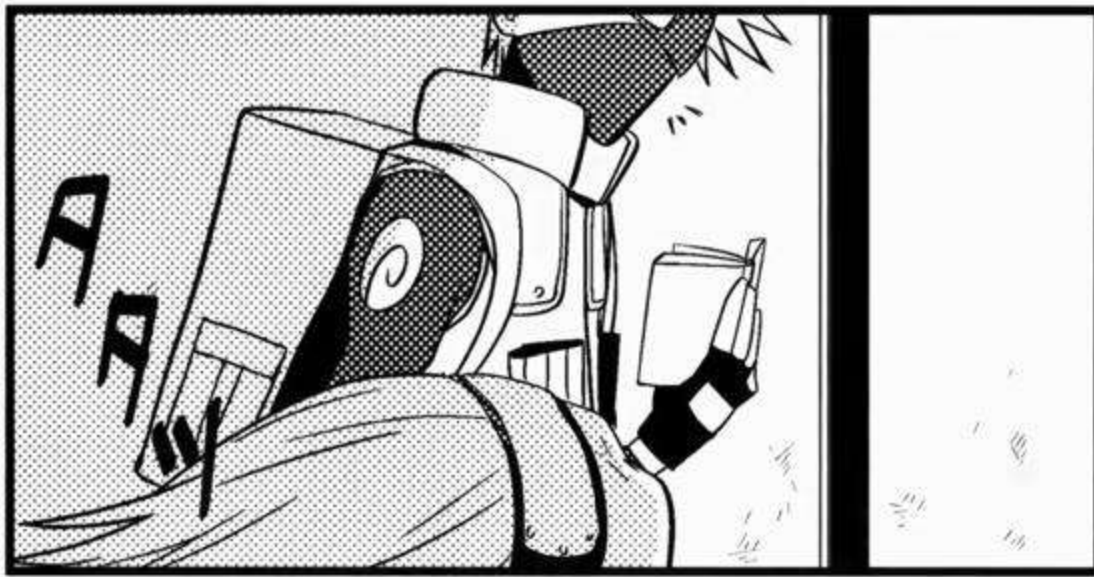
なうに？
さつきから

だって泣いてるの

先生だよ

先生ってば
変なの

全部…
終わりにするから





虚ろな隙間

ゲスト ゆのさん

素敵なカカサク小説本当にありがとうございましたゆのさん！
HPにも素晴らしいカカサク作品が沢山ありますので是非是非！

ゆのさん

HP <http://id19.fm-p.jp/228/pemo0king/> (携帯用)

以下QRコード



——サスケ君で格好良いよね。

——サスケ君が今日一緒に帰ってくれるって。

——サスケ君がね。

——サスケ君でば。

…サスケ、サスケ、サスケ。

サクラの口から出てくる言葉は、いつもサスケの事ばかりだ。

——ああ、面白くない。

* * * * *

任務に向かう七班。サスケの隣には、いつものようにサクラが並んで歩き、ナルトが面白くなさそうにそれを眺めている。それを後ろから見ているカカシ。

アカデミーで受付をすませて廊下を歩いていると、向こうから手に何か大量の紙を抱えたイルカが歩いてきた。その形相はイルカにしては珍しく、怒りの色を浮かべている。

どかどかと大股で歩み寄り、カカシの前でぴたりと止まった。

「カカシさん。俺、報告書の提出期限……お伝えしてましたよね。一週間も前に」

「……あ……そうでしたっけ？」

ぼりぼりとうなじを掻くカカシ。

イルカの手にある紙……報告書は大量で、これから受付に届けるのを間違えて持ってきたのではないかと思う量だ。

「……カカシ先生……さぼりすぎだってば……」

「そ〜お？こないだまではこんなには溜まってなかったはずなんだけどねえ……イルカ先生、多めに持ってきてませんか？」

「持ってきてないです」

イルカは青筋を立てながらも引きつった笑顔で告げる。

任務は日々遂行しているのだから、書かなければ溜まっていくのは当然のことなのに。

「カカシさん、もう本当に一日だって待てないんです。だから！」

「……だから？」

カカシの暢気な返事に、イルカに青筋が浮き出る。

笑顔で青筋たてるイルカ先生は久しぶりだなあ……ナルトを叱り飛ばしてるときによく見かけたけれど。

なんて昔をのほほんと思いついてたサクラだが、次のイルカの言葉で現実には引き戻された。

「今日中にこれ！提出して下さい！サクラ！カカシさんが逃げないようにお前も手伝え！」

「ええっ？なんであたしが!!」

冗談じゃない！

「報告書の提出と作成は責任者の義務でしょ?!カカシ先生が最後まで責任

取ればいいじゃない！」

「最後まで全うしてくれるか分からないからお願いしてるんだ！頼んだぞ！サクラ！」

サクラの抗議を無視して、イルカは報告書の束をカカシに押し付けた。

この万年中忍！！何が大丈夫か言ってみろ！

「……これから任務があるので……今日中はちと無理かと思うんですけどね」カカシがそう言うが、イルカから

「大丈夫です。午後の任務は俺が担当しますから。アカデミーの空いてる教室使って下さい」となんと準備のよい答えが返ってきた。

ナルトはイルカとの任務に喜び、サスケはカカシを一瞥して鼻で笑うとその後に着いて歩き出す。

「あ……待ってサスケく——」

サクラがサスケの腕に手を伸ばしたとき。

ぱしん、と乾いた音が響いた。

サクラの手が思い切り払われた。サクラは腕をそのまま下ろしと下げ、固まった。

サスケは一瞬しまった、とでも言うように眉を蹙めたが、小さく舌打ちをして何を言う事もなく、行ってしまった。

その背中をただ見つめるサクラ。

払われた手は胸元できゅつと固められている。

俯く頭。カカシからサクラの表情を伺う事は出来ないが。

泣いて、いるのだろうか。

「……行こうか」

カカシの言葉にサクラは小さく頷いた。

資料室に入ってからのサクラは、忙しく手や口を動かした。

こんな溜めておけるなんて先生つてずばらね、とかイルカ先生が手伝えば良いのにね、とか。口を動かしながらも報告書を書く手を休めず。

考え事に捕われまいと懸命に勤しむその姿は、カカシにはとても痛々しく映る。

そもそも、サクラはあんなに自分を無下にするサスケのどこが好きなのか、カカシには理解出来ない。

サクラを袖にするサスケを目にする度に腹が立つし、無理に笑うサクラを見るのはもつと苛々する。

——面白くない。

「ねえ、先生……」

ふと、サクラが声をかけてくる。

「……ん？」

「サスケ君さ……」

ぴくり、とカカシが持つペンが動く。

「……………あたしのこと…見えないみたいだね……………」

サクラはカカシの入れたお茶を啜り、溜め息を吐き机に突っ伏して手を翳した。

サスケに拒絶された手だ。その手は、ほんの少し赤くなっている。

ああ、そうだよ、サクラ。

サスケは望んで闇に向かって歩いていて、陽の光なんか望んでいる訳じゃない。孤独と絶望と、それに伴う憎悪と復讐心を支えに生きている人間にとって、どうして平凡な日常を望むというのか。見えてる、見えてないの問題ではない。見ている場所が、最初から違うのだから。

例えがんばって、傍で笑っていても声をかけても、サスケがそれに応える事は絶対にない。サクラの想いを、サスケは全力で拒絶し続けるだろう。カカシにはそれが分かる。

サクラだって、本当は分かっているはずなのだ。

なのに、見ないふりをして。

ああ、なんだ。サクラだってサスケを見てなんかいないじゃないか。なんだ。だ。

だけどサスケを好きな自分を正しいと信じている。その胸に抱く思いを、恋と。信じているから。

だとしたら、その信じているものを挫かない限り、サクラはサスケへの恋にしがみついたままだ。

独りよがりな恋。子供のおままごと。

その剥き出しの傷口。

「慰めてあげようか？」

髪を撫で付けながら言ったカカシの台詞に、サクラは違和感を感じた。

言葉とは裏腹に、何の感情も込められていない、無機質な感じがしたのだ。

それはいつそ寒気すら感じる口調で、サクラは背中に針を刺された様なぴり、という痛みが走る。

髪を優しく撫でる手や、隣から圧迫感を感じ、サクラの心臓が冷たく鳴り響く。

顔を上げる事が出来ない。

なんだか、今のカカシと眼を合わせてはイケナイと思った。

そうしているうちにカカシの手がサクラの後頭部を引き寄せたかと思うと、髪に何か柔らかいモノが触れた。

「え？」

慌てて顔を上げ、サクラは固まった。

机に頬杖をついたカカシはマスクを外して。額宛ても外していた。

その露になった顔にサクラは見入ってしまう。

自分が思っていたよりカカシの顔はずっとずっと端正で、それは野性的で…けれど怖いくらいに真剣な眦をサクラに向けていた。

——心臓が、うるさい。

「せ、先生……なに……」

サクラはどもりながらもカカシの手から逃れた。

背中を向けるのが怖くて、後ずさりしながらカカシと距離をとる。カカシはその唇に笑みを浮かべ、立ち上がるとゆっくりとした足取りで近づく。

「ん？なに……何が？」

その低い声が、とても冷たいモノに感じる。

「何が……」

一歩、一歩とカカシはサクラを壁に追いつめ、サクラの顔の両側に両手をついて逃げ道を断つ。

カカシの眼をサクラは見れなくて、視線を反らし、覆いかぶさる様な形になったカカシを押しつけようと胸に両手で突っぱねる。

けれどカカシの体はびくりともせず、そのサクラの抵抗にカカシは口角をあげて不適に笑う。

「なに……震えてんの？」

「あ……」

反らした顎を掴み、正面を無理矢理向けさせ、その唇を塞いだ。

「んう」

逃げられないように後頭部を押さえ、深くサクラの口内を犯す。

「ん……ふうっ」

息苦しそうに呻くサクラからカカシは一度口を離した。

「っはあ……っ」

涙を滲ませ、肩で苦しそうに息をつくサクラはカカシを睨みつける。

その潤んだ翡翠の瞳。

その泣くのを堪える顔を。

——めちやくちやにしてやりたい。

「……何すんのよ……なにすんのよっつ!!」

信じられない!この変態!離せ!

喚くサクラは体を振り、脚をばたつかせ抵抗を見せたが、カカシは意にも介さない様子でサクラの首筋に顔を埋める。すう、とサクラの香りを吸い込んだ。

「慰めてやるって言ったろ？」

カカシは一纏めにしたサクラの手を頭の上に押さえつけ、空いた手でサクラの体を弄る。

首筋から鎖骨へ、鎖骨から胸へ、胸から腹へと、カカシの手が徐々に下がってゆく。

「サスケに冷たくされて可哀想に……」

「ここにぽっかりと開いた穴をさ、俺が埋めてやるよ」

「うあっ」

カカシの指がサクラの心臓を指差し、その胸を掴んで柔らかく歪ませ、悲

鳴を漏らす唇を再び塞ぐ。

今度は先程よりも深く。サクラの小さな口内に舌を侵入させ、歯列をなぞる。

舌を絡めとり、吸い上げ、悲鳴も食るかの様な荒々しい口付けを繰り返す。

どちらのモノとも知れぬ唾液が口の端から溢れ、サクラの顎を伝う。

カカシはサクラの胸を服の上から揉み上げ、その感触を楽しむ。

そうしているうちに、サクラの胸の頂が固くカカシの指にその存在を主張して来た。

「んむうう！」

そこを重点的に撫でられ、サクラは悲鳴を上げる。けれどカカシに押さえ込まれ、その手から逃れる事は出来ない。

舌を吸われ、ぴちやぴちやという水音がサクラの鼓膜を犯す。かりかりと

布地越しの胸への攻めが繰り返される度に、サクラの体の芯がじんわりと疼くように痺れてきた。

体が、熱くなってゆく。頭がくらくらする。

——なに、これ

サクラの体から力が抜けてきたのを見計らったように、カカシが唇を解放する。

二人の間を銀糸が繋ぎ、それをまたカカシが舌で舐めとる。

「いい顔になったじゃない」

「……なに……なに……なに……」

「ん？気持ちよくなるお菓子をちよつと、ね。やつと効いてきたみたい」

ほら、とカカシはサクラの耳朵を甘く食む。

「ああつ！」

それだけで、サクラの背筋は甘く痺れ、体が震える。

くくく、とカカシは満足そうに口の端を歪め、喉の奥で低く嗤った。

「寂しいんでしょ？サクラ」

ぎ、とサクラはカカシを睨む。

けれどその瞳は潤んで、ただ発情を訴えるカカシを煽るだけのものではない。

「サクラの傷ついたココ……満たしてやるよ」

「やああ……つう……」

服の上からでもはつきりと分かるくらいに浮きだった乳首をカカシが摘み上げる。

びくびくとサクラの腰が浮いた。

いやいやと、かぶりを振る。

「……ちが……ああつ……こんな……いらな……いらな……」

「違わない」

カカシの低い声に、サクラの体が固まる。

「ちが……イ……あつ——つつ!!」

カカシの手がサクラの下肢に伸びサクラは悲鳴を上げた。けれどその悲鳴はカカシに再び塞がれる。

こんなの。

あんまりだ。

「——つつ」

痛みにカカシは顔を歪め、サクラを拘束していた腕が緩んだ隙にカカシを突き飛ばした。

覚束無い足取りで椅子や机にぶつかりながら出口へと走ってゆく。

サクラは助けを求め扉を開けると、廊下にいる誰かにぶつかり、その人に縋り付くように抱きついた。

——誰でもいい。

——助けて。

「た、すけて」

サクラは震える声でその人に言った。

けれど、振ってきたその声に、サクラは凍り付く。

「——いいよ。助けてあげる」

顔を上げると、そこには。

「——カカシせんせ……い……」

「噛み付かれたの？」

カカシは机の上に座りサクラを抱え上げ、両脇の下から腕を通して胸を軽く揉み上げる。

「うん」

カカシが返事をする、後ろはあいかわらず気が強いね、と笑っている。

「あ……あん……ううつ」

前と後ろから、声が聴こえる。自分を挟んで会話するカカシ……カカシ達。

噛み付いた唇の端に血が滲んでいる。普段口布に隠れていて白いカカシの

口元に、ソレはひどく扇情的に映った。

鎖骨に唇を寄せ、紅い華を散らしてゆく。それにさえ体は甘く痺れ、思考

回路が追いつかない。

「まあそういう所も好きなんだけど」

いつものつかみ所のない雰囲気纏って、平然と言った台詞をサクラは理解出来なかった。

「……すき……?」

サクラは問いかけながらカカシを見上げた。後ろから耳に囁くように「そうだよ」

と低い声が応える。

「……ちが……う……ちがう！」

サクラが涙を流しながら否定の言葉を漏らす。

「先生はっ、ふざけてるだけじゃない！」

ぼろぼろとサクラの涙は首筋を伝い、鎖骨へと落ちてゆく。

その涙をカカシは指でなぞる。

「ふざけてなんかいない」

「サクラは俺がどれ程サクラを抱きたかったかなんて知らないデシヨ」

カカシの声がまた低く変わった。

笑顔で言うてはいるけれど、そこから滲み出るある種殺気のような気配に

サクラの体は硬直する。

サクラはただ首を横に振る。

「わからせてやるよ」

ほら、と両手を後ろに捻ると、サクラから小さな悲鳴が聞こえた。

びくり、と体が跳ね、さらに顔が赤く染まっつてゆく。

カカシの両足の間、に、ある……ソレ。

「……なんなのか、ぐらいわかるよな。もう子供じゃないんだし」

前から腰をサクラに押し付ける。

「うあ……あっ……んう……」

布地越しでもはつきりと解る、成長しきったカカシ自身。

怖いくらいに、熱い。熱くて、固くて、それに反応して体が切なく鳴く。その堅さで軽く擦られただけで、サクラの頭は真っ白になりそうだった。後ろも押し付けられると、胸の奥の方が切なくなつて、もうどうしようもなくなる。

「——いや……も……やめて……」

サクラの小さな声に、カカシは喉の奥で低く笑う。

首筋を、うなじを舐められ、ぞくりとした感覚に身を震わせると、カカシがそのままチャックをくわえ、ジジジ、とゆつくりと臍まで降りしてゆく。

カカシの銀の髪がサクラの胸元を降りてゆく。

「ふうう……」

その仕草はとても厭らしくサクラを刺激した。

「可愛い……」

合わせを両側に開き、後ろから手が伸びて胸を包みこむ。

「あっ……やあああっつ」

きゅ、と乳首を摘まれると、サクラから嬌声が漏れる。

チャックから口を離し、ズボンと下着を一緒に脚から引き抜く。

あ、と言う間だったので、サクラが気付いたときにはカカシはそれをサクラの手の届かない所へと放り投げた。

両足をきつく閉じようとする、胸を掴んでいたカカシが片手を離し、今

度は膝の裏から腕を入れ閉じさせまいと右足を開く。

サクラは涙を流しながら、いやいやとかぶりを振る。

曝け出されたソコを、カカシがじつと見ている。

「ふふ……イイみたいじゃない」

「……あぁっ！い……っ」

前からサクラの胸の色づいた部分を口に含み、口の中で転がすとサクラが鳴く。

軽く啄み、歯を立てる。

後ろからは耳朧に舌を差し込み、わざと音がするように舐る。

秘唇を上下に緩やかに撫で、指に蜜を絡めてゆくと、サクラの腰が跳ねた。

抵抗したいのに、薬のせいで甘く蕩けた体は淫らがましくもつと、と切に

腰の疼きを訴える。もつと奥へと。

カカシの手がもどかしくて。もう、この疼きをどうにかしてほしい。

唇を噛み締めるサクラに、意地悪そうに顔を覗き込むカカシ。

「ん？」

カカシが頬に手を添える。

その冷たさが心地好くて。手に頬を擦り寄せて眼で訴えた。

「……いい子だね」

サクラは潤んだ瞳でカカシを見つめ、その手に自分の手を重ねる。

「ふぁ……あぁっ！」

カカシの指がサクラの中に入り込んだ。

熱く溶けていたそこは、カカシの指を飲み込んだけれど、ぎゅつと締め付

けるきつさに、思わず苦笑する。

内壁を擦り、ゆっくりと出し入れを繰り返す。

ぐちゅぐちゅと粘っこい音を響かせると、指の動きに合わせてサクラが声を

あげる。

もう、声を押さえる事等できないのだろう。

一本から二本へ指の数を増やして、中でぐるりと円をかくように。

「あ……あぁ……んっ！うんう……っあぁあ……！」

内側を抉りながら中の蜜を掻きだすように指を動かして。

後ろのカカシがサクラの胸を刺激する。

サクラの声が一際高くなるのに呼応して、中がきつく指を締め付けてくる。

ガクガクと揺れる腰を押さえつけて、締め付ける膣に指の関節を擦り付け

るようにする。

「せん……せんせ……いやだ……こ、こわい……」

サクラが髪を振り乱して、必死にカカシの手を止めようとしたけれど。

「だ……いじょうぶ。このままイツちやいなよ」

「サクラの可愛い顔、みせて」

後ろからサクラの頭を優しく撫でる。

目の前のカカシは、サクラの瞳を捕えて離さない。サクラも視線を逸らす事ができなかった。

その真剣なくらいに怖い眼。或いは冷涼とも取れるその視線が、サクラを追いつめる。

いやいやと、サクラは髪を振り乱して首を横に振るが、体は心を裏切ってその先を求める。

「いや……こわ、いつ……みないで……つふああああ——！」

ぐちゅ、と奥まで指を突き入れるとサクラは高い声を出して、高みへと昇りつめた。

痙攣が治まるのをまって指を抜くときに、ちゅ、と音がして、サクラはその刺激にまた甘く鳴いた。

いったばかりだというのに、きつい。薬はまだ効いているのだろう。

サクラははあ、はあと苦しそうに肩で息をして、後ろのカカシに体を預けている。

後ろのカカシは楽しそうに、果てたばかりの体を摩る。

その吐息は熱くて。薄く開いて濡れた唇はまるで誘っているかのようだ。

「……っあ……いや……いやだ……！」

後ろからサクラの膝の裏に手を通して、左右に割り開く。

何をされるのか分かったのだろう。

サクラが体を振って抵抗を見せたけれど、快樂で弛緩した体は自由が利か

ずにただ腰を揺らしてカカシに擦り付ける形になっただけだった。

「……サクラ、眼をそらすな」

滾った自身をあてがいが、ソコに馴染ませるように動かすと蜜を絡めて水音が鼓膜を刺激する。ぞくり、とカカシの背が震える。

サクラは惚けた眼でカカシを見つめかえし、ずっといやいやと首をふっている。まるで小さな子が駄々をこねるみたいに。

「……せんせ……せんせ……こわい……こわい……いよ」

「こわい、の……せんせい……みない、で……」

お願い、最後は消え入りそうな小さい声だった。サクラの涙をたどりながら、指先を頬になぞらせる。

「だ……め」

「——っつきやああああ——っつ!!」

サクラの中心に一気に押し込む。圧迫感と、痛みでサクラは悲鳴をあげた。

「……っく……」

サクラの中はきつく。溶けそうなくらいに熱く、カカシを包み込む。馴染みのある血の匂いがカカシの鼻腔をくすぐり、それと女の匂いが合わさ

ってもうどうしようもなくカカシを昂らせた。サクラを宥めるのは後ろのカカシに任せた。

瞳の中は多少の抵抗は見せたけれど、薬のせいかわかすのに支障は無い程

に濡れそぼって柔らかい。

「……………ほら……………つながった……………」

「は……………ああ……………つく……………」

後ろから耳を舐め上げて、胸の頂を刺激すると、膣が締まってカカシを刺激する。

カカシはゆつくりと大きな動きでサクラを犯しはじめた。

「いやだあつ……………ああ……………つつつ」

痛みのためかきつく眼を閉じて、形だけとなった抵抗を見せる。

繋がった部分が熱くて、まるで獣のように本能に任せてサクラを攻めたてた。

悲鳴とも嬌声ともつかぬ声が部屋に響く。

「可哀想に……………こんなに泣いて」

「うああつつ?!」

サクラの脚を掴み、ぐるりと廻しながらサクラを四つん這いの格好にさせる。

今までサクラを後ろから抱きしめていたカカシが目の前にいる。

髪を、頬を唇を撫でながら、カカシに貫かれてあられもない声を上げている自分を、カカシが見ている。これは、悪夢なのではないか。

「いや……………ああつ!」

バックから犯す形になったカカシが奥を突き上げる。

「いや、じゃないだろ」

「サクラが助けてって言ったんデショ?」

前から、熱くそそりたつた自身をサクラの唇にあてがう。柔らかいその感触が、カカシを狂わせる。

「ん……………ふう……………」

サクラの小さい口いっぱいにつっ込んで、逃げないように後頭部を押さえ腰を動かす。

押し出そうと懸命に舌を動かすが、それはカカシに快楽を与えるだけだった。

前から胸に手が伸び、胸の頂を指で刺激されると膣がきゅう、と締まるのが分かった。

その締まったな膣を壊しそうな勢いで擦りあげる。

前も、後ろも、中も。

サクラが今感じているのは自分だけなのだ。

その事に、カカシは歪んだ笑みを浮かべる。

こんな自分を見て欲しくない。

怖い。怖いくらいに気持ちよくて、自分がどうにかなりそうで。もう、戻れなくなりそうで、怖い。

白く霞んでゆく思考で、カカシに視線で懇願する。もうやめて、と。

だけどカカシは残酷なまでに優しい笑みをうかべて、サクラを見下ろしていた。

「眼をそらすな」

「んっつっむ——っ！」

後ろから突かれながら、口を犯されて。初めての行為のはずなのに、体は快樂を求めてよがり狂う。

体が怖いくらいに熱い。頭がおかしくなりそうだ。

銜えながら、頭を振る。もう、無理。

髪を掴み、腰の動きが激しくなる。サクラの口の中で、カカシが脈打つのが分かって、口の中いっぱい苦い味が広がった。

「んう……えうっ」

煙と供に目の前のカカシが消えて。

カカシはサクラを仰向けに机に押し倒した。

向かい合う形になって、カカシはサクラの鎖骨や胸に口付けて紅い華をまた散らしてゆく。口の端から零れ出たものを親指で拭い、もう一度サクラの口に指ごと含ませた。

頬は紅潮し、体は桜色に染まっけていて。

細い顎を固定して、その虚ろな翡翠の瞳を覗き込む。

サクラの瞳にはカカシしか映っていない。

カカシの瞳にもサクラだけが映る。

今、互いの存在はそれしかないのだ。

「……せんせ……カカシせんせ……」

サクラがカカシの頬に手を添える。

サスケに払われた赤くなっているその手。白い肌によく映える赤。サスケがつけた傷。

その赤くなっている部分を、まるで愛おしそうにキスをするカカシの姿があまりに優しく。サクラの思考は甘く痺れてゆく。

繋がったままサクラを抱き寄せると、助けを求めるようにサクラはその細い腕をカカシの首に廻して縋り付いてくる。

小さい子をあやすように、宥めるようにカカシはサクラの髪を撫で頬を撫で、背中をさする。

「——ねえ、サクラ……俺は好きだよ」

「その綺麗な薄紅色の髪も」

「翡翠の瞳も」

「——ずっとずっと見ていた」

揺らされながら紡がれる甘い睦言は、サクラの思考も掻き乱す。

蒼灰と、深紅の色。相反する色に射抜かれ、サクラはその瞳に捕われて、

もう逃げる事が出来ない。

「——気持ち良いでしょ？」

カカシの言葉に、サクラが頷く。

「——サクラの望む事……俺がサクラにしてやる」

「一緒に気持ちよくなってあげる」

「——いっしょ、に……？」

ぼうつ、とカカシの深紅の瞳に吸い込まれるように呟く。

「俺と一緒に……」

カカシの低い声がサクラの鼓膜に響く。

「そう……いいかげんに俺を……俺だけを見な」

「………せんせだけ………？」

霞みゆく思考に、その甘い言葉はまるで呪詛だ。

サクラはカカシの肩口を痛いくらいの力で掴む。

「——せんせは、あたしだけを見てくれる………？」

サクラは今、カカシだけを感じ、カカシだけのために鳴き、カカシに縋り付いている——カカシは満足そうに口角をあげた。

「——サクラがソレを望むのなら」

「あつ……ああ………っひっ！」

サクラの眼を捕えながらカカシは律動を激しく繰り返す。水音が響き、サクラの喘ぎ声もはや抑える事等ない。

余す事なく媚肉を抉り、奥の感触を楽しむ。

「あつふああ——っつ」

カカシの突き上げに合わせてサクラの腰が淫らに浮く。逃がさぬように腰を抱き寄せ、折れそうな程にきつく抱きしめる。

「サクラ………」

「ひっ……あつ！うあ………！」

カカシの深紅の瞳が動き出す。快樂に頭が白くなり始め、深紅の瞳に引き込まれるように意識がふわふわとしてゆく。

「カカシせんせ………せんせ………あつ………い——っつ」

「………」

サクラはがくがくと腰を痙攣させ、二度目の絶頂を迎えた。サクラの収縮に促され、カカシはサクラの最奥へと己の欲を吐き出す。

「——俺だけのものだ——」

「あ………」

深紅の瞳に捕われていたサクラの思考は、霞みゆく意識と共に手放した。

* * * * *

「——え？もう終わったんですか？全部?!」

「……まあ、可愛い教え子が手伝ってくれたんで……イルカ先生の計らいのおかげですかね？」

受付に報告書を提出に行こうとしたら、扉を開けた所で丁度イルカと出くわした。

七班の任務は既に終わり、ナルト達はそのまま解散したそうだ。

まとめてイルカの手に残けると、驚いた表情で報告書とカカシの顔を見比べている。

——この人といい、ナルトといい。もう少し表情を顔に出さないようにできないもんかね。ぽりぽりとうなじを搔くカカシを驚いた様子で見ている。

だが、報告書の枚数を確かめ、イルカはもうまさに「助かった」という顔で足早に去っていった。

あの量をこの時間で終わった事が未だに信じられない様な顔だったが、それもそうだろう。

最初から報告書は出来上がっていたのだから。

イルカの姿が見えなくなるまで廊下で見送り、ぱたんと扉を閉めた。

報告書が滞れば、イルカは必ずカカシに直訴しにくる。捕まえて書かせるために、そこに見張り役を着かせるのも、彼ならば考えそうなことだ。或いはそれがイルカ自身だったかもしれないけれど、任務が入っている日に合わせて顔を出せば、七班の誰かを指名するだろうという読みは見事に当たった。

「——ほんと、イルカ先生のおかげだよね」

長椅子に横たわるサクラを見下ろした。

窓から西日が入り込み、サクラの未だ紅潮している頬を照らす。薄紅色の髪や、白い肌が夕日に染まって、綺麗だと思つ。

カカシは口の端に笑みを浮かべサクラをふんわりと抱き上げた。

今、サクラの体からは二人の体液が混ざり合った匂いがする。首筋に鼻を埋め、その匂いを確かめっているとサクラが身じろぎをし、カカシの指をその小さな手で力なく掴んだ。

——写輪眼で確かに落としたはずだけど……起きたか？

サクラは薄らぼんやりと瞳をあけて、力の入らないその手でカカシの手を確かめるように握る。何か苦しいのか、眉間に皺が寄っている。

カカシはサクラの背中を摩り、

「大丈夫……」

そう告げ、サクラのその小さな手を握り返した。

それに満足をしたのか、サクラはふう、と小さな息を吐くとまたその瞼を閉じ、すぐにカカシの耳に寝息が聞こえてきた。

「……俺なんか掴まっちゃって……」

カカシが喉の奥で嗤う。

——望んだ事は、本当に些細なものだったのに

サクラを抱いたままカカシは窓から外に飛び出し、その姿は黄昏に紛れた。

黄昏はもうじき闇に染まりゆく。

訪れる闇から、逃れる事などできないのだ。

あめまちのべが
NARUTO
UNOFFICIAL FANBOOK#2
KAKASHI×SAKURA
R-18
2011/01/09

甘ザンカの泪
<http://296.oops.jp/>
info@296.oops.jp
twitter*296namida

印刷 金沢印刷様
禁 無断転載・複製・加工・再配布
オークションへの出品もお止めください
どうかお願いします

NARUTO UNOFFICIAL FANBOOK

KAKASHI*SAKURA

TEARS OF SAZANKA

PRESENTS

ADULT ONLY

